

# ニュースレター 事業短信

from AIKOH

2015(平成27)年12月18日(金) No.120

<発信者>社会福祉法人愛光理事長・法澤奉典  
043・484・6391(本部)／043・484・6571(理事長室直通)  
(URL) <http://www.rc-aikoh.or.jp/>  
(Eメール) [mail@rc-aikoh.or.jp](mailto:mail@rc-aikoh.or.jp)

## CONTENTS (今月号の内容)

- \* 日誌抄録(1ページ) : 2015年11月1日(日)～12月17日(木)
- \* おもな動き(2ページ) :
  - ・補正予算案など承認(評議員会・理事会)
  - ・県監査
  - ・迫る制度改革をどう迎え撃つか ほか  
(職員状況:2015年11月中)
- \* 現場の内外で(3ページ) :
  - ・活動歴37年に感謝(塚谷さん引退)
  - ・「警女」をご存知ですか
  - ・施設入所者とマイナンバー
- \* 情報&ニュース(4ページ) :
  - ・「1億総活躍」緊急対策
  - ・介護職Uターン作戦
- \* マイタウン(5ページ) :
  - ・市議と意見交換 ほか
- \* 三代目燈台守(6ページ) :
  - 「お母さんは、大好きです！」

## ▽日誌抄録(2015.11.1～)

月/日(曜)	記事
11/4(水)	韓国ラファエルの家訪日団来日
6(金)	日韓交流あいとひかりのコンサート(四街道市文化センター)
7(土)	ラファエルの家訪日団利用者交流会・帰国
8(日)	立冬
9(月)	運営会議(月次報告:視障センター研修室)
13(金)	Aikohフォーラム「社会福祉法人改革とどう向き合うか」(千田ホール)／フランス・パリで同時多発テロ(市民130人死亡)
18(水)	県身体障害者福祉大会(青葉の森文化ホール)
19(木)	後援会運営委員会(本部ボランティア室)
23(月)	勤労感謝の日
24(火)	運営会議(本部第1会議室)
25(水)	来年度採用職員選考(第3次)
27(金)	ちばてん文化講演会(視障センター研修室)
12/1(火)	2015年新語流行語大賞決定(「爆買い」「トリプルスリー」)
5(土)	評議員会・理事会(はちす苑)
8(火)	県指導監査(本部・ルミエール・めいわ・リホープ・はちす苑・よもぎの園)
14(月)	運営会議(月次報告:視障センター研修室)

## ▽おもな動き

### 補正予算案など承認

12月5日、改選後2回目の評議員会と、それに引き続いて理事会を開き、本年度の半期決算を踏まえての補正予算案、定款の一部変更案（事業の改廃関係）を審議していただきました。新評議員からは、それぞれの専門分野あるいは地域代表として、介護現場での事例や地域での取組みについて活発な意見交換をしていただきました。

### 県監査

12月8日、県印旛健康福祉センターから担当者が来訪され、社会福祉法に基づく定期監査が実施されました。今回の監査対象事業は、法人本部、ルミエール・めいわ・リホープの障害者支援施設、特別養護老人ホームはちす苑、就労継続B型事業（よもぎの園）です。それぞれの施設の視察と書面による検査を実施、何点かご指導いただきました。正式には後日書類によって指導事項が通知されることになっております。

### 迫る制度改革をどう迎え撃つか

国会休会中とあって話題から多少遠のいていますが、いずれ近いうちに対応のあれこれをめぐって再び一騒動は避けられず……そんな観測もあって、関心の熱をさまさないようにと、セミナーを開催いたしました。題して「社会福祉法人改革とどう向き合うか」。講師にお招きしたのは、法案化作業に関わった武居敏氏（全国社会福祉法人経営者協議会副会長）。そして、ありきたりの制度解説では既にご承知の方々には物足りまいと、問題の核心に切り込んで議論するために、「聞き手」として酒井綱一郎氏（日経BP社取締役、法人副理事長）というキャスティングにいたしました。近隣の業界関係者、法人役員、評議員など70人が千田ホールで討議に参加しました。

焦点は制度改革が社会福祉法人経営をどう変えるか。規制強化という側面を考えれば、むしろ経営に縛りが増えます。しかし一方で、開かれた社会福祉法人経営を目指すという点では、「見える化」が進むことはいいことです。今回の改革は、大筋では当法人でこれまで自主的に取り組んできたことの延長線上にあるという確信を得ることはできました。制度実施のガイドラインになる政省令がどうなるか、満を持しておきたいと思えます。

### 本館に新たに自動ドア設置

佐倉事業所本館から各施設への通路出入口は、事業所内でも人の往来が最も激しい場所です。アルミサッシ製の扉は開閉回数の多さから経年劣化が進み、金属疲労状態は極まっております。通行する利用者や外来者の皆様にご不便を掛けておりました。改良工事計画を総務課で検討の結果、自動ドア方式の採用に決し、11月17日より使用を開始いたしました。環境の変化による事故などの発生のないように、歩行者のアプローチの際のスピードとドアの開閉のタイミング等に配慮し、いまのところスムーズに通行されております。

#### ■職員状況 (2015年11月中)

- \* 採用：2（パート2）
- \* 退職：3（サポート1・パート2）
- \* 2015年11月30日現在：職員現員 363人  
（正職 158・サポート又は常勤嘱託 40・パート又は非常勤嘱託 165）
- \* 育児休業：2（リホープ1・よもぎの園1） \* 派遣：1

## 現場の内外で

### 活動歴 37 年に感謝（塚谷さん引退）

見事な職人の手さばきで、利用者の髪をチョコキン、チョコキン。千葉市内で理髪店を営まれていた塚谷（つかや）敏雄さん、節子さんご夫妻が施設を訪れられるようになって 37 年もの月日が経ちました。ボランティア活動歴としては愛光ではもちろん最も長きにわたっておられます。

お二人は理髪店を既に閉じられ、千葉市内のお住まいでお過ごしです。ただ最近多少腰痛なども出てきたので、この折にと「引退」を決意されました。まだまだ続けたいという思いもおありのご様子でした。

十分すぎる社会貢献をしてこられ、長年の労をねぎらい、文字通り「手弁当・無報酬」というボランティアのお手本のような活動に、心からの敬意を込めて、感謝を申し上げます。ありがとうございました。

### 「<sup>こぜ</sup>瞽女」をご存知ですか

映画『はなれ瞽女おりん』は岩下志麻主演、篠田正浩監督の作品（1977 年公開、原作は水上勉）でした。三味線を弾きながら家々を門（かど）づけして歩く、視覚障害女性だけの旅芸人一座の物語でした。恐らく、この映画によって世の多くの人に、かつて各地に実在したこの「瞽女（こぜ）」と呼ばれた女性のことが知られるきっかけになったと思います。旅芸人そのものが社会の変化につれ、高度経済成長期ごろに衰退し、その姿を見ることもなくなってしまいました。そしてそのうちの数少ない伝承者も数年前に亡くなったそうです。

NHK ラジオ「ラジオ深夜便」で「最後の瞽女」を紹介したのが当時 NHK のディレクターであった川野楠己（かわのくすみ）さんでした。その川野さんを講師に迎えて、11 月 27 日に視障センター研修室を会場に、Aikoh フォーラム「ちばてん文化講演会」が開かれました。伝統芸の継承者・小林ハルさんへのインタビューや貴重な演奏の録音を交え、たくましく生き抜いた女性たちのお話に耳を傾けました。（興味のある方は、川野楠己著『最後の瞽女 小林ハル』（NHK 出版、2007 年）などをご覧ください）

なお、講演会に先立ち、点訳ボランティア 4 名、音訳ボランティア 4 名の方がたに、法人より感謝状を贈り、視覚障害者福祉への貢献を顕彰いたしました。

### 施設入所者とマイナンバー

賛否の論議も続いているようですが、マイナンバーの交付が始まりました。その悪用防止についてのあれこれも話題になっています。特に施設入所者個人情報でもあるマイナンバーの取り扱いには、所轄庁からの通知も出されております。

- ① 入所者にマイナンバーの通知があった場合には施設職員は開封してはならないこと（本人又は家族、後見人に手渡す）
- ② 特殊な状況（家族や後見人がいないか紛失する可能性がある場合）に限り、施設が保管すること
- ③ 保管する場合は台帳を作成すること
- ④ 万一紛失した場合は市町村に再発行を依頼することがマイナンバー取扱い上の基本事項とされています。

## ▽情報&ニュース

### 「1億総活躍」緊急対策

先日発足した内閣改造の“目玉”、名付けて「1億総活躍」には国民を鼓舞する意図もあるようですが、ネーミングも含めていまいち浸透しているとはいええないようです。とはいえ、やはり国のトップの号令は身近な所にも及んでくるようです。

政府は11月26日に少子高齢化問題対策として、「希望出生率1.8%実現」と「介護離職ゼロ」の目標達成に直結する政策案を打ち出しました。

主な具体策として、待機児童解消のため、2017年度末までの認可保育所の整備拡大、認可保育所以外の多様な保育サービスの受け皿整備を進めることとともに、介護離職ゼロに向けては、特別養護老人ホームの自宅待機者解消を目指し、介護保険事業計画などで定めた2020年度までの増加枠38万人以上の整備加速化、高齢者向け住宅の整備（12万人分）を前倒し・上乘せし、50万人分に拡大する、というものです。

また介護に取り組む家族への支援策として、介護休暇を分割取得できるよう制度を見直すほか、介護休暇中の所得を現在の40%から育児休暇給付額と同水準の67%を念頭に引き上げる方針も示されています。

国の政策は「臨機応変」ということもあるのですが、これまでは「特養整備抑制」と言われておりました。ところが「介護離職」という問題が顕在化するや、政策の軌道修正です。「朝令暮改」とまでは言いたくありませんが、われわれの経営戦略も見直しを迫られ、右往左往するばかりです。ハコモノは資金も大がかりになりますが、需要の変化や報酬改定の影響も大きく、簡単に事業を廃止することもできません。政策動向を注視し、経営戦略を決断していくことはますます難しくなります。

### 介護職Uターン作戦

12月15日配信のニュースです。介護職員が結婚・出産・育児などで離職した場合、福祉・介護職に再就職すれば20万円程度の準備金を貸し出す（5年間働けば返済免除）という政府の方針が決まったそうです。本年度補正予算に盛り込まれ、3月までに実施ということです。本欄でも繰り返しご報告しているところですが、介護現場の人材確保問題はいまや赤信号状態。経営者は報酬カット回避というよりも、現場が回らない→入所者を受け入れたくてもできない→減収による経営危機、という“負の連鎖”状態です。

介護福祉士資格取得条件の緩和措置や専門学校入学準備金の無利子貸し付け、定年退職者の就労働きかけなど、急場しのぎ的対策が打ち出されていますが、所詮対処療法という限界も見えています。「1億総活躍」政策の一環という位置づけに期待をもっているのかどうか、率直に言って、効果には半信半疑です。

## ▽マイタウン

### 市議との意見交換

子育て支援への関心は、国・地方共通の課題になっています。子どもたちの育成は、学校教育のみならず、保育所や幼稚園、また地域社会全体の問題として取り組むべしということも当然です。児童福祉の分野では、児童厚生施設（児童センター）や学童保育所が公的施設としてその一翼を担っています。ご案内のように、昨年4月から、佐倉市の学童保育所運営は指定管理者の手に委ねられ、南部地域にある7か所の学童保育所と南部児童センターの指定管理者には当法人が選任されております。

佐倉市議会では指定管理者の運営状況や現場の諸課題について現状を把握するために、11月10日、市議会議員と各指定管理者との意見交換会を開催しました。席上で出された質問は、職員処遇と研修の実施状況はどうなっているか、複数の学童保育所を運営するのは、サービスの質を確保するうえで負担にならないか、地域との関わりや連携はどうなっているか、といった点でした。他の圏域はいずれも企業系の指定管理者であるところから、独自の取組み（例えば、プロサッカー選手を招いての体験教室の開催、保育コンサルタントの配置）を実施している所もあり、事業者間の情報交換の場としても参考になる話を聞くことができました。

### 近隣に新たな社会資源

精神障害者向けの社会資源が不足していることはよく知られているところです。6月に新装開業した就労継続支援B型事業所「ワークショップかぶらぎ」も、そういう意味で関係者からは、これを機に精神障害者のための社会資源開発が加速することへの期待が高まっているところです。しかし潜在ニーズはあるのになぜそうした事業所ができていかないか。専門職養成が追いついていないこと、障害特性に対する社会の理解の不足はそうした事業への関心の低さにも影響して、既存の社会福祉法人も事業進出に消極的です。

そうした状況にある精神障害者をめぐる社会環境ですが、近隣に“仲間”ができたという心強い情報が届きました。所在地は八千代市になりますが、京成電鉄の勝田台駅近くにこのほど開所した就労継続支援B型事業と自立訓練の多機能型、定員20人の「レーヴェン勝田台」。ワークショップかぶらぎとサービスエリアを共有する関係にあり、ニーズの掘り起こしなどではむしろ協働して取り組んでいくことにも期待したいところです。

「お母さんは、大好きです！」

“ヤナギダクニオ”と聞いて思い浮かぶのは、「柳田國男」と「柳田邦男」の二人だろう。「國男」はわが国民俗学の大御所(故人)。一方「邦男」は1936年生まれで、現在も執筆や講演で活躍中のノンフィクション作家。ここで取り上げるのは後者である。

これまでこの人の著作を何冊か読んできた。中でも人の生と病と死について書かれている著作からは、私はその視点の深さとあたたかさ、いつも自らを省みる機会を与えられてきた。最近、心に染み入るような柳田の文章に久しぶりに再会する機会があった。その一節を紹介したいと思う。(以下引用)

「その子は重い障害を持っていたが、母親は普通の子以上にその子を愛し、育てていた。彼女は子どもに知的発達の遅れがあっても動揺することなく、その子なりに、心がのびやかに育つように向き合ってきた。私が『素晴らしい』と感じたのは、次のような出来事だった。

その子は、小学校の特殊学級に通うようになった時、障害児の手当や手帳を受けるために必要な医師の診断を受けた。その検査の中で医師が、

『お父さんは男です。お母さんは？』

と問う質問があった。だれしも、『女です』

と答えるだろうし、母親も自然にそう思った。ところが、その子の答えは意表をつくものだった。迷うことなく、大きな声でこう答えたのだ。

『お母さんは、大好きです！』

なんと素晴らしい答えかと、私は感動してしまったのだ。母親も、子どもが見かけの知識でなく、子どもにとっての母親の本質を言ってくれたことがうれしくてうれしくて、胸が一杯になったという。

診断の結果は『IQ37』という数字で示されたが、母親にとってIQのレベルなどは二の

次だった。IQ37の世界って実はとっても素敵で優しくて、あったかい世界なんだと思ったという。母親のそういう受けとめ方も素晴らしい。

この子の答え方を少しばかり哲学的に考えると、確かに子どもにとっての母親の本質を言い当てている。『お母さんは女です』という答えは、子どもにとっての具体的な自分の母親のことではなく、父親と母親の性の違いを概念化し、一般化したに過ぎない。つまり、母親を自分から切り離して、対象化し、一般化した答えでしかない。別の表現をすれば、知識としての母親であって、実感している母親ではない」

(柳田邦男『人の痛みを感じる国家』129頁、新潮社、2007)

後段は少し難しかったかもしれない。著者は本書の別の所で、子どもたちの周辺から携帯電話やパソコンを一掃すべきだ、とも主張している。それは、手軽にまた便利に情報や知識を得ることやネット上での人間関係と、ほんとうに「わかる」とか「わかりあう」ということとの間には大きな違いがある、と言いたいのではないか。

「お母さんは、大好きです」

と答えたあの子と母親のような関係は、スマホに熱中するばかりでは、まず生まれないだろう。

「障害という条件を背負った人びとの生活と人生はとても大変なのに、なんと豊かな気づきや物語を生み出していることか」

とも言われてみて、長年心身にハンディをもつ人びとにかかわる仕事に従事してきたわが身の不明を恥じるばかりだ。われわれは「宝の山」の中にいるのだ。周りは本物の人と人との関係を築くきっかけに満ちあふれている。つまりわれわれは、柳田邦男の本にある「素敵で優しくて、あったかい世界」への入口にいるということなのだ。

(法澤 奉典・のりざわ ともり)

## 前売り開始!! 新垣勉コンサート

来年春のコンサートの入場チケット前売りを始めました。お早目にお求めくださいますよう、ご案内申し上げます。

開催期日：2016年4月17日（日曜日）

会 場：佐倉市民音楽ホール

開 演：13時30分（開場13時00分）

料 金：3,000円（全席自由）

<チケット販売場所>

愛の灯台基金事務局 043（484）6391

佐倉市民音楽ホール 043（461）6221